

特別記念講演会

昭和62年11月1日（日）  
東京都 椿山荘

「東洋大学の建学の精神と将来像」

東洋大学教授

高木 宏夫

## 一、「自由」の校風とランクづけ

皆さんはお名前をご存じない方も多いかと思いますが、ただいまから井上円了という方の考え方と大学との関係についてお話ししたいと思います。

いまご紹介がありましたように、研究所に長くおりまして、私立東洋大学に移ってまいりました。そのときに研究所の仲間が言ったことは「ドウヨウ大学へどうして行くんだ」ということでした。ドウヨウ大学ではない、東洋大学だと言ったんですが、「ドウヨウ大学を知らないのか。ドウヨウ大学というのは、いつも内部でけんかをして動揺しているからだ」という話なんです。それで、私は不安をもって赴任しました。

私は学生のいない研究所が長かったものですから、教育ということがわかりませんので、講義には大変苦労しました。知識を伝えるのなら、本を読んだほうがいいわけですから、私の論文なり何なり列挙して読んでくれるほうがいいと思いますし、「教師とは何か」と思い悩んだ経験をしました。それは今でも変わりません。

しばらくしてから、このようにいろいろなよくない評判を聞いているにもかかわらず、国立の大学から移りますと、なんともいえない自由さがあると感じました。これは戦後、伝統が壊れたために、伝統に縛られない自由さだと、私は最初思っておりました。そういった自由さが、実は建学の精神に基づいていると知りますまでにはずいぶんかかったのですけれども、後日、自由について調べてみますと、明治三十五年ごろ日本の新聞や学界等で大騒ぎになる哲学館事件がありますが、その事件の当事者である

中島徳蔵という倫理学の担当の教授が、後に学長になっていますが、その方の書いたもののなかに見つかったのです。「この学校は月給は非常に安い。安いけれども、居心地がいい。それは非常に自由な空気だ」と書かれていました。こういうことを見つけるまでには私も相当かかりました。動揺大学と言われたことも、なるほどとごく最近わかったのですけれども、実はこの言葉一つに私立大学の苦難の歴史が込められていたということでした。

私立大学は官学を補完するためのものと考えられていました。基本的に重要なところは官学の出身者が担当し、実務的な部分は私立大学出身の中堅幹部が担当するものと国家は考えていたようです。そのような大学発展の歴史があります。

思想、信教の自由は旧憲法にもありましたが、「公衆の安寧秩序を害せざるかぎり」とか、「天皇は神聖にしておかすべからず」といった言葉が示すように、それは限定付き、条件付きのものでした。そうなりますと、哲学というような真理そのものをあらゆる事象について追求していく分野とこの法とはなじまないという根本問題がありました。

東洋大学に限らないのですけれども、私立大学の苦難の歴史は経営の面でも大きいものがありました。また、建学の精神といわれるような、その大学ごとの特性を発揮していくことが非常に困難で、私立大学が自分のいいところを十分発揮できなかったということでした。

大ざっぱな結論だけを申し上げましたけれども、私立大学の立場についてこういったことを知りました。また、私自身経験的に感じた私立大学と官学との違いという点を申し上げたいと思います。

私が教員になりました、五、六年たったころのことです。そのころは社会学部で卒業論文は必修科目でしたが、卒業論文を見て、はっとびっくりしたことがあります。東大の研究所の研究者は大学院の論文指導はやりましたが学部部の学生については無関係でした。そのころの大学院の学生の論文に比べて、東洋大学の学生の論文のほうが優れていると思われる論文が七つありました。私はこれにはびっくりしました。びっくりしたという意味に二つあります。

一つは私が無意識のうちに、東洋大学の学生はできないんだというレッテルをはっていたということです。無意識、無自覚です。これは大変な間違いないですが、それまで気がつきませんでした。講義は一生懸命やっているつもりなんですけれども、肝心なところが抜けていたんではないかと思えます。

もう一つは、やる気になれば天才以外はそう変わらない成果を生み出すということを見つけたことです。つまり、意思と努力とがマッチしますと、若い学生はどんどん伸びることを教えられ、そこにも無意識にランクづけをしていた自分を見つけました。基本的には、そういう学生を伸ばしていく教育をしなければならぬと常に思うのですけれども、いろいろな条件でなかなか難しいこともだんだん気がつくようになりました。

このような形で、私立大学は程度が低いというレッテルをはっている自分に気づきましたが、それは一般社会の反映だったと思います。最近偏差値によるランクづけが起き上っていますけれども、今から二十四、五年前の話ですから、そんなに厳しいランクづけがあったのではないと思うのですが、それでもおそらく今よりはランクが低かったと思います。

このランクづけが間違いだということを学生から教えられたという私の経験のほかにも、皆さんお帰りにお持ちいただくことになるかと思いますが、この本『井上円了の教育理念』をつくる過程からも多くのことを教えられました。新書本を作るための委員会ができたときには、『井上円了語録集』を作るということを決定していました。語録集といいますと、『毛沢東語録』がすぐ頭に浮んで、文革につながるいやなイメージがありまして、どうも私は気が進まない。名句、名言集のようなものを作って教祖のように仕立てるというように思えて、どうも気に沿わない。それには私の過去の研究との関係もあるのですが、私は『日本の新興宗教』(石波新書)を出しているのです、教祖に仕立てることになるという連想が特に強かったと思います。そこで、一年ぐらいの紆余曲折を経て、題は「井上円了の教育理念」とありますが、井上円了個人の伝記づくりではなくて、創立者がどういうふうに大学の教育理念を考えていたのか、それをどのように継承・発展させてきたのかというかたちの問題意識でまとめていくことに皆さんの意向もだんだん変ってきて、語録集をやめる決定をしたのが一年足らず前のことです。

この本が生まれた背景には、ある意味での全学的成果の結集があります。「井上円了研究会」という、総合研究が三つの部会に分かれて三十人ぐらいの先生方のプロジェクトを組んだ研究体制をつくり、大学からの助成金で約八年間行われました。先生方のこの研究成果が前提になってこの本が生まれました。また、それを基軸にして、図書館の方々、三周年記念事業の「年史」の編纂室の方々や、事務局の方々、さらにいろいろな機関の職員、モニターの学生などたくさんの方々の協力を得てはじめて生まれたのがこの

本です。

その過程のことですが、当時一年生の私のゼミの学生から、できる、できない、真面目、いいかげんなどとりませて十一、三人に、モニターになってくれるよう頼み、亡くなられた哲学の飯島宗享先生のきちんとまとめられた論文をはじめとして、専門家の論文をまず読ませました。驚いたことに、みんな読んできました。私の考えでは、まずこの学生とこの学生はおそらく読んでもわかるまい、だから読んでこないだろうと決めていたんですが、それは間違っていました。前のような意味で、私には軽蔑した意識はありませんでした。もっとフランクに現状に受け止めていました。そして、いろいろな話を聞いているなかで、「君たちは東洋大学とはどういう大学だと思っているんだ」と聞きました。入学前にどう考えていたかについては、私は教室で調査をしていまして、「おとなしくて、まじめで、地味な学校」というイメージを持って入学してきたことは知っていました。だいたいこれが学生仲間の定評のようです。その上で、自分との関係、つまり自分で選んで入学したかどうかをきいてみると、入学試験で落ちて、一流の私大へ入れなかったとか、国立へ入れなかったとかいう劣等感がひじょうに強く、友達と会ってもなるべく東洋大学と言わないとかという実情をばつぽつと話し始めました。「どうして教師にそういう話をし始めたんだ」と問い返しましたところ、実はこの教育理念に関わりをもつて勉強をしたところが、このような大学がほかにないことが分つて、それから勉強しようかなという気持ちが起こったからだというのです。

こういう仕事に携わったことも大きい一つの原因だと思いますけれども、私立大学のいろいろな精神がなかなか伝わりにくいものだとわかりまし

た。その当時三年生の学生も五、六人モニターになって貰いましたが、図書館へ行って資料を取ってくるとか、いろいろな仕事を手伝っていた学生をモニターに頼みました。この学生はある意味ではかなり知識を持っています。だからこの学生たちが大学の理解をし、少しでも誇りをもつのは、当然と言えば当然のことですが、ほとんど何もわからない一年生が、そういう気持ちを持ったことは、東洋大学に限らず、現在の学生がいかに精神的なものに飢えているのかを物語っているように思えます。そして現在いろいろな意味で問題になっていますけれども、自分は落ちこぼれまではいかなければ、どうせこの程度と自分でレッテルをはっている、そのレッテルから脱却したがつていることがわかりました。

## 二、「宇宙主義にたつ日本主義」

井上円了の教育理念の基本の一つは、哲学館を設置するときに書かれている、「余資なく有暇なきもののため」の学校設置という目的があります。「余資なきもの」というのは、東京にきて語学を勉強して大学に入るといふほどの余分のお金のない人たちということですが。「有暇なきもの」というのは語学を勉強する暇がないという意味です。意外な感じをされるかもしれませんが、明治二十年当時の大学は、外国人お雇い教師が全部外国語で講義しています。当時はまだ東京帝国大学ではなくて東京大学ですが、東京大学の学生は外国語ができなければ入れませんので、東京大学予備門に入りまして、三年間語学の勉強をすることになっています。これには能力だけではだめでお金もいります。それが当時の状況です。

井上円了という人は、今の新潟県の長岡市近くの田舎の真宗大谷派の坊さんの長男です。将来は住職になることが予定されていました。大変な努力家で、勉強のできた方でしたから、勉強して十七歳で漢学の先生になってみたり、洋学校へ行って少し英語を勉強して、また英語の先生になったりしながら、東本願寺から給費生としてお金をもらって東大に入りました。家は寺の格も低いですし貧乏ですから、当時の農民の苦しさとか、生活の苦しさをよく知っている人で、一生貫いていますけれども、大衆をどう教育していくかを、教育の根幹に井上円了は置いていました。

哲学館という教育以外にも、全国に簡易中学を置くという明治五年に作られた制度を復活実現しようとしています。そして全国の貧乏な人がその場で勉強できる条件を作ろうということも考えていたようです。

先ほどちょっと申し上げた哲学館事件以後は、全国の農村や地方都市へ自分のほうから出かけて行って、本人の言葉によれば「通俗教育」ですが、今いう社会教育を死ぬまで続けています。こういう点では啓蒙家と言われってきましたが、フランス的な意味での啓蒙者とは違ってきます。たとえば哲学の理解ですけれども、先ほど話がありましたように、「諸学の基礎は哲学にあり」と言っただけで、どんな学問でも基礎には哲学があるという十八世紀のドイツの哲学の主流をそのまま受け継いだかたちの表現をしています。いろいろな学問の背景にある哲学といいながら、右翼のレッテルをはられてきた創立者井上円了は、特にマルキシズムの関係の人の思想史では、天皇主義者、右翼というかたちで扱われています。左翼学生も同じレッテルをはっています。

しかし、そういう言葉が出てくるような時代背景がありました。言葉

で申しますと、井上円了に有名な言葉が二つあります。一つは「お化け博士」というレッテルです。たいてい「お化け博士」というと、お化けが好きな人とか、お化けを認める人のような印象を受けますけれども、そうではなくて、お化けを科学的に糾明しようとした人ということです。明治十七年から着手しています。東大のなかで「不思議研究会」をつくって、自然科学者や哲学者や、その当時のいろいろな勉強をしている若い仲間たちと研究会を組織して、『妖怪学講義』『お化けの正体』『迷信と宗教』などの本を書きました。妖怪学が最も有名ですけれども、ポピュラーな面では地方講演でもそういう話をしましたので、「お化け博士」という名前が付けられました。

外国の百科辞典を見ますと、たいてい井上円了は出ていますけれども、そこには「お化け博士」という意味のことが必ず書かれています。そういう点が啓蒙学者と呼ばれた点ですが、その奥にある哲学という理解が非常に大事ではないかと思えます。円了さんは哲学を頭で理解するとか、哲学館を出た人が哲学者になるとかということではないとはっきり言っています。

思想というか、ものの見方、考え方の基本になるものが哲学で、それを明らかにしていくための必要な手続きとしての哲学という意味のことを言っています。哲学者は一千万人に一人あればいい。しかし、哲学は真理、その現象や事実の背後にある自然科学的事実とか、物体とか、あるいは人間の事象とか、自然界の事象の背景にある真理を求めることが大事だということです。そういうことになりますと、いきおい観念的になっていきますけれども、当時の言葉で「実際」という言葉を使って、現実の生活あるい

は事実、現代の言葉で言えば、客観的な事実のなかに見つけることで、観念遊戯ではないという考えです。

井上円了の最も有名な、一世を風靡した『仏教活論序論』と題された単行本があります。その冒頭に「人だれか生まれて国家を思わざるものあらんや。人だれか学んで真理を愛せざるものあらんや。余や鄙賤に生まれ、草莽に長じ、加うるに非才浅学なるも、またあえて護國愛理の一端を有せざるものにあらず。」と、美文調の言葉で書かれています。日本が近代国家を形成する過程で、不平等条約にしばられている状態からぬけだして、どうして国家が独立できるのか。あるいは東洋の各国のように植民地化してしまうのだろうかという当時の危機意識が強く反映しています。

鹿鳴館時代といって、政府が今の有楽町に鹿鳴館を建てて、洋装でダンスをして条約改正をもくろんだ時代です。キリスト教がはやって白人と雑婚して、言葉も英語に変えることが文明開化だと大まじめにいわれて、民族文化を放棄しよう、自分がいま生きている立場を観念的に避けて、カルチャーショックの相手に同化してしまおうということが、大まじめに論じられ、それが流行していた時代です。

ここで言う、「だれか国家を思わざるものあらんや」ということは、もう一度現実に戻ろう、つまりどう力んでみても日本人はやはり日本人であり、持っている文化のなかにヨーロッパとは異質のもっといいものもあるのだという国粹主義が出ておりますが、その後の国粹主義とはちよつと違っています。この時代の国粹主義に集まった人たちは、ヨーロッパの文化を勉強し、それになじんだ人々でした。

東大の出身者、北海道のクラークのお弟子さんたちによって、この立場

を主張する「政教社」が結成されました。この時代は一種の文化の変革期にあたりますが、その変革過程のなかで、もう一度素直に自分の立場に立つ、そして見直そうということを主張したのであって、護国といっても、偏狭な護国ではありません。

その一年後に欧米に外遊した井上円了は、宇宙主義を前提とする日本主義という言葉を使っています。宇宙主義という宇宙は、井上円了によりますと、地球はいずれ消滅する星雲のなかの一つの星にすぎない。星雲は常に新しい星を生成している。そこで、いずれ地球も消滅するということが真実だけれども、そのなかで日本という国家があること、日本人つまり自分たちがいるという現実も事実という考え方です。

井上円了は「護国は表なり。愛理（つまり真理を追求し真理を愛すること）は裏なり」と言っています。表と裏というのは、表裏一体ということに、一つの見方を表わしたもので、現実から背後にある真理を追求することを意味しています。現実を無視しないで、そこから出発しようということとです。私どもの社会科学、人文科学の領域で言いますと、現実を無条件に捨象しない、捨象するときには捨象するだけの条件を厳密に設定していることです。

その当時のより進歩的な新しい理論であった「進化論」が背景となつていますから、「宇宙主義」という言葉にありますように、進化論にたつ科学者の東大仲間と話し合い、哲学館を作つてからもその人たちが講師によって講義を聞いているように、自然科学の知識も吸収しようというかたちの哲学的見方をしていたことがわかっております。

「妖怪学」というお化けの研究のなかに人魂とか幽霊とかがあります。

人魂については当時のスウェーデンの学者の実験が引用されています。明

治二十三、四年ごろの文献を引用して、リンの化合物によるものと結論づけています。早稲田の先生のなさったプラズマの研究とはちよつと違つて思いますが、人魂のしつぽが縦に引くのが燐化合物で、横にいくのがプラズマだから、人だまの正体はプラズマであるということです。当時の円了さんの集めた文献を見ても、たいていの人だまとか幽霊の絵はタテに尾をひいているように思います。私はお化けの研究が専門ではないので、どちらが正しいのかわかりません。しかし、当時はまだお化けとか、幽霊とかが、生き生きと社会的に生きているときで、河童やきつねも人をだますと信じられていました。これら妖怪を現実のものとして、明治の人が受け止めているときに、科学的説明をしてみたところに、井上円了の真理追求という態度が表われていると考えられます。

さきほどちよつと触れました、円了さんの考え方の特徴の一つ護国愛理について、ある本には「哲学館の建学の精神とした」と書いていますが、「哲学館」時代には制度的にはどこにもそういうことは位置づけられていません。思想、信教の自由というか、円了さんは人に自分の思想を押しつけない、客観的な講義はしていますが、そして哲学と真理ということを標榜はしていますけれども、自分の思想の押しつけはしていません。これが哲学館から東洋大学に変わって、東洋大学が経営困難となりますと、時代状況が変わって、護国愛理もゆがめられてゆきました。

もしお時間がありましたら、後から電車のなかででもこの本をお読みいただきたいんですが、そのようにゆがめられる発端となる「哲学館事件」という事件が起りましたのは明治三十五年のことです。

### 三、教育理念をゆがめた哲学館事件

当時井上円了は、教科書検定委員をしていますし、教育勅語を表に掲げて本を書いていますから、当時としては政府からいられることはない世間も見えていたのではないかと思います。事件の内容と言いますのは、中等教員の免許を学内の検定試験だけで与えるという制度で得た資格を剝奪したという事件です。

当時四つの私立大学がこの資格をもっていました。一つは慶応です。慶応は設備不十分というかたちですぐ取り消されています。次は早稲田です。早稲田は条件が整わないということで、自分の方から返上しています。もう一つは国学院です。国学院は当時の天皇制の思想的拠点のようなところですから、これだけとりつぶし対象にはなっていない。残るところが哲学館です。この哲学館で事件が起きたのは、文部省から派遣された視学官が臨席し、卒業試験に立ち合ったところで起っています。そのときの倫理学の「動機善にして悪なる行為ありや」という出題の解答をめぐって起りました。

これは当時の教科書が国立を含めまして、主だった学校が使っていたイギリスのミューヘッドという人の教科書（桑木巖翼さんの翻訳）がクロムウェルの革命を前提とした倫理問題で、純然たる理論の問題です。

その理論の問題を天皇の弑逆に通じる極めて危険なものとして、後日弾圧を受けました。弾圧の仕方は免許取り消しです。その学科だけではありません。全部です。倫理学だけではなく、国文学から漢文学全部です。全く理由ないことです。くわしくは、『井上円了の教育理念』をこ

覽下さい。この弾圧が起つたことを知つたのは、井上円了がロンドンへ行つてからです。

ごく最近わかつたことですけれども、小村寿太郎の外交文書が出てまいりまして、ミューヘッド教授がイギリス人なので日英同盟に関わるから、大使館に問題を大きくしないように命じて、井上円了のロンドンの活動を無視して問題を一切とり上げないようにさせています。井上円了がイギリスからそつとしておもしろくないだろうというようなことを言つたことが、「天皇主義に忠実な極めて体制的な人間」というレッテルをはられる原因となつています。

しかし本人は本当にくやしかつたとみえて、大学を退いてしまつてから、哲学堂を作つて哲学を中心の大衆活動を始めたときに、「哲学館事件の記念に哲学堂を作る」と言つています。それぐらい本人は思想、信教の自由を侵されたという意識が濃厚だつたと思います。

大学ではその後、経営困難という問題が起つています。卒業生数の統計をみますと、学生数六十人ぐらいたつたのが、卒業生十一人と激減して、途中分散が想像されます。これでは私立学校としての経営が成り立たないということですから。しかも井上円了は、大口寄付を求めず、全国を歩いて零細な金を集めて、大学の教育費に充てていました。現在全国に円了さんのいろいろな「書」が残っていますけれども、それはお札に字を書いて、寄付をいただいで、大学を経営してきた名残です。

井上円了は大衆の喜捨による大衆の学校を、大衆に還元するために作つていたと見ていいかと思いますが、学生が入つてこないために経営できなくなつて、講師陣、父兄たち、卒業生たちが一丸となつて免許交附の再申

請してくれという要求されます。この要求に対して、円了さんは不当にとりあげられて、失権した学生が復権するまでは再申請できないと主張しました。復権することが先で、次世代の学生よりも、まずこの復権にあると主張したのでです。

こうして円了さんが申請をしないために、卒業生、教員、学生らから非難され、いろいろな上申書が出てくるなかで引退を決意をしたようです。いままで引退の理由がどうもはつきりせず、浮気のものですぐいやになつて辞めていったということさえ書かれていますけれども、今度本をまとめる中でこのような資料が出てきて、引退原因の一つが分かりました。

#### 四、井上円了の自由開放主義

井上円了は結局はこういうことで大学から身を退きました。しかしその後大衆の中にとびこんで全国を歩き、教育に身を捧げました。けれども、この二つの教育に一貫していたことは、井上円了の教育理念という項に一応とりまとめてありますが、まず「自由開放主義」ということです。

自由開放主義ということをも、国家の制度がだんだん整つてくると官僚制が強くなつて、規則が強化されるので、これでは学生が窒息するから、学生寮を作つて学生の自治にし、問題が起これば学生が自分たちで処理するといふふうにするべきだと述べて、実践しています。

円了の全体の行為について、いろいろな噂、たいていは悪い噂が残っています。大学を途中で放り出して辞めてしまつたとか、何か仕事に手を切るとすぐ次に移つていく。浮気ものだとか、研究はあのへんで終わりで、



後は学者としてはだめだとか、近い人ほどそういうことを書くので、それを信じてマゴビキの形でさまざまに書かれていますけれども、一生をずっと通観してみますと、当時の人には理解されにくかった点があるのではないかと思います。

一つは、田舎の育ちのわりに封建的ではなくて、個人中心主義であったことです。私の個人信仰としては真宗大谷派であると記述し、親鸞の教えを求めていましたので、近代の自我とは違いますけれども個人という点がふつうの人よりもはつきりしていたようです。当時の村とかなんとか一家とかという家族制度的な共同体的なものからは、もっと厳しく自己といいますか、人間を追求している点がありました。

特に封建的な意味での一家の親分にもならないし、特別の面倒見もしない。非常に親切な人のようでしたけれども、そういう意味で共同体べつたり、家族主義や家制度とはちよつとなじめないものがあつたようです。

ですから大学を私物化しておりません。一銭一厘まで書いたものを残して、このように経営できると言つて、次の人に全部を譲つて、財団法人としてできる点をはつきり言っています。哲学堂を作つたときもそうです。自分で金を集めてきて作つたのですが、それも遺言で財団法人の維持を求め、それができなくなった場合には、国家か自治体に寄付するように言い残しています。

そういう意味ではちよつと家制度になじまないけれども、逆に言いますと、現代には非常になじみやすく、人間としての真理を追求していく点が実践に移されたとも言えるかと思ひます。

「官主義」に対する「民主主義」という言葉も使っています。大正時

代になつてから、朝日新聞に私立学校について書いています。いま思想が悪くなったのは私立学校のせいだと文部省は言うけれども、もし私立大学を悪いものと思えばつぶしてしまえばいいではないかと言っています。

私立学校を何でもかんでも縛りつけてくるのを、もっと開放して援助金でも出して、自由に教育できるようにすればいいのではないか。何でもかんでも官が頭にのらなくてはいけない、官僚統制をしなければならぬという官主義に対して、自分のほうは民主主義だから、意見が合わない。大学に戻つてくれというけれども、私は戻らないということも言っています。

## 五、これからの東洋大学

こういった視点から東洋大学をみていただきますと、冒頭申し上げた勸業大学と言われるようなものは、私立大学なかでも東洋大学の経営の困難さから起こっている問題だとご理解願ふと思ひます。

もう一つは、私を感じていた自由ということ。自由ということの背景には、人間の奥にある精神の問題、先ほどちよつと学長が言われた精神の問題がどこかにある。いまの言葉で言いますと、マックス・ウェーバーが言つてわりあい流行つたことのある言葉ですが、「エートス」と言ひますか、「人間に行動させていく衝動力」と言ひますか、その根源の精神を持つことが大事だし、それを追求していく必要があるということです。

これは人によつてみな違うけれども、到達するところは真理ですから同じだと円了は考えました。しかし、彼が明治二十年前後にキリスト教を科

学に耐えないものだという非難をしていますけれども、次の一線だけはつきり区別しています。キリスト教も仏教も宗教だから、エートスのようなものを求めていく点は全く同じであるといっています。

仏教もそれを求める、唯物論も求める、唯物論といつても、マルキシズム以前の唯物論ですけれども、当時の言葉でいう唯物論を求めて、そこから入っていく。どちらから入っても真理にいたる。人間の生き方はいろいろあるから、自分は仏教の信者だから、彼の言葉によりますと大乘仏教の精神を体得する道を行んでいるが、これも法相宗とか天台宗とか、理性中心の分野もあれば、浄土宗とか真宗とかという感性から入っていく領域の両方がある。いずれにしても到達するところは同じであるといっています。こういう意味での思想、信教の自由を、彼は哲学館事件を通して非常に大事にしてみました。

ところで、哲学館事件で弾圧されたことについてみると、ある意味では円了さんの文章の中に原因があると考えられます。それは一度も摘発されてはいませんが、天皇も天皇制も歴史の中の一プロセスにすぎないもので、永遠不変のものとしていないことです。彼は長岡の出身で国破れて山河ありという経験をしています。領主が明治の官軍に大砲で城ぐるみつぶされましたから、天皇制の作られる過程も知っていますし、国体と言っても、歴史のなかの一過性のある天皇制の地位を考えました。

仏教的な「塵」とか「劫」とかいう天文学的な時間、空間観念のなかでものを考える人ですから、あくまでも現実を重視するという点で、護国も天皇制もとらえたようです。そういう意味で考えますと、弾圧される必然性があつたとも言えます。天皇制も絶対化しない。しかし現実を大

事にする。こういうことが護国愛理の根底にあつたということです。

東洋大学も井上円了が在学中すでにやつたように、新しい技術をどんどんとり入れていかなければなりません。というのは次のようなことです。明治十年代は活版印刷が大変珍しいことで、仏教関係の書で二人目ぐらいに円了さんは出版しています。そして当時のベストセラーになっています。学生時代から論客として著名人でしたが、卒業と同時に活版刷りの本を出して一層著名人となり、その翌年三十才にして哲学館を創設しているので、すから、そういう意味では思想という領域では少し早熟と言いますか、経験の不足もあつたかと思いますが、ともかくもう一方では決して自分個人ではない背景ができていました。

その背景には、その当時の仏教界、思想界、「政教社」も含めていろいろな分野の支援がありました。個人の面では勝海舟もその一人です。勝海舟は「三大恩人」の一人ということになっています。彼自身が育つた環境、彼を支えた周りの人たちのなかで醸しだされた自由の空気は、新しい教育手段を「講義録」というかたちの現代でいう通信教育を始めることにもなりました。

こういったことを考えますと、現在二万五千といわれる東洋大学のようなマスプロ教育の欠点を補っていくためには、十分な基礎知識を身につける教育のあり方にあるいはハイテクの技術をどう使うかということも、真剣に検討しなければならぬと考えますし、同時に顔見知り・フェイス・ツィ・フェイスの人間関係を大事にした人間の触れ合いのなかから、学生の個性を引き出して発展してゆける援助をしていくことが重要な課題になっていくと考えます。

これからは国際人としての日本人という立場も大事になってきています。語学ができることはもちろん必要ですが、それだけでは翻訳機にやがてとって代わられることとなります。世界的視野にたった上で日本という主体性をはつきりさせなければならぬ時代です。円了さんのいう宇宙主義にたった日本主義の現代化が必要でしょう。それを、井上円了の言う「頭だけではなくて生活を通して理解していく」ことが、東洋大学のこれからの特長であり目標であると考えている次第です。

皆さんは教育という点で私どもとはまたちがったご苦勞をなさっておられると思いますが、この機会に、東洋大学もまたそれなりに個性ある私立大学としての特色をうち出そうと努力をしているというところをご理解願って、長い目で育てていただければ大変ありがたいと思います。

これでお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

### 講師紹介

高木宏夫

大正一〇年 大阪府生

昭和二四年 東京大学文学部宗教学科卒業

昭和二四年 同東洋文化研究所助手・研究員

昭和三三年 同非常勤研究員

昭和三四年 東洋大学社会学部助教授

昭和四〇年 同教授

専攻 宗敎社会学

### 著書

「日本の新興宗教—大衆思想運動の歴史と論理—」

「人間性回復への道—同朋会運動の—典型」

「井上円了の教育理念」他